

健康文化

ボディーランゲージ

高田 健三

以前アメリカに居た頃、クリスマスシーズンにメキシコシティを訪ねたことがある。同市を中心に、紀元前三世紀頃から芽生えた、テオティワカン、マヤ、アステカ等の文明の遺跡があちこちに残っていて、それを訪ね歩くのがその時の目的であった。何分にもメキシコは初めてであり、スペイン語も挨拶ぐらいのことしか話せないで、英語の話せる運転手付きのタクシーを、あらかじめ三日間、旅行業者に手配しておいて貰った。このシーズン中、特にカソリックの国は何処でも同じだが、街筋には飾り付けが施され、夜はイルミネーションが灯って一層クリスマス休暇の雰囲気が醸し出される。冬は米国よりも温暖で物価も安いので、この時期はアメリカ人の観光客で街は大変に賑わう。ホテルやフライトなどの予約は早くからしないと取れない程である。

一日目、二日目は予定通りタクシーがホテルに迎えに来て、テオティワカンのピラミッドなど運転手はスケジュールを順調にこなしていった。この分だと古代文明興亡の歴史を存分に楽しめそうに思えた。ところが、三日目の運転手に問題があった。人が代わるのは構わないが、殆ど英語が話せないのである。苦勞して何とか判断出来たことは、会社から簡単な引継ぎメモを渡されて来たことだけであった。それでは約束が違うので、早速に、市内にある旅行社の代理店にクレームの電話をすると、予定の運転手が急病で代わりを出したが、今日のところはそれで勘弁してくれと云うことであった。気は進まなかったが、見ると人は良さそうに見えるし、これ以上注文を付けては本人に気の毒になったので、一応はオーケーすることにした。

ところが、最初の遺跡探訪のところで悪い予感が当たって終った。事情を知っている彼としては一生懸命にサービスしようとして、あちらこちら案内しながらスペイン語(?)で説明してくれるが、こちらが知っている以上の事は殆ど分からない。そんな調子で観て歩いているうちに昼ごろになった。市外に遠出するとき、昼食は指定されたそれなりのレストランでとる事になっている。しかし彼は一向にそれらしい気配を示さない。そこで昼食はどうなっているのかを訊くことになったが、その時になってはたと気がついた。どうやってその

事を分からせるかである。初めは、ランチは何処で何時頃食べるのかと英語で訪ねたが、案の定、全く通じない。仕方なく身振り手真似を交えてのボディランゲージで食事のことはどうにか通じた。時計を指さして昼だから“指定”のレストランに行こうと彼が気づくように誘っても、その“指定”が通じない。ジェスチャーでは表現のしようもない。

そうこうしながら民家も疎らな丘陵地を走っているうちに、道沿いに洒落た建物が目に入って来た。漆喰塀の上にブーゲンビリアの鉢植えを並べ、カーキ色の瓦に白い壁、“RESTAURANTE”と看板が出してある。正しくレストランである。アメリカを発つ前に、友人から、現地ではシティーホテル以外で水など生ものは絶対口にしてはいけないと聞いていたが、この場は自分の責任で判断せざるをえない。たたずまいからこれなら良さそうだと思い、運転手も誘ったが、彼はランチボックスらしきものを見せて、自分は要らないと身振りで断った。結局のところ、代理店と彼との間の連絡不十分で、彼は昼食のスケジュールを聞いていなかったのである。

外国を旅行していると、大学やホテル、それに有名店などでは、日本語はともかくも英語が通じるが、下町や地方ではそうとも行かず、一寸した事でも、互いに理解するのに、結構、時間とエネルギーを費やすことがある。この冬、台湾に行った折り、台北市の中心街にある日本の大手デパートに小物を買ったところ、一階正面入り口付近に居た五～六名の女子店員の誰もが、英語も日本語も話せないのには驚いた。正面入り口はデパートの顔の部分である。外国からの観光客も多い街なのにと理解できなかった。結局、いらいらしただけで用を足せずに出て来てしまった。しかし、近年アジア地域間の経済交流は目覚ましく、その意味でも日本人はもっと中国語会話を身につける必要が有ると自分に言い聞かせる気持ちにもなった。現実には、日本企業の中国を中心にしたアジア地域への生産拠点のシフトが進む中、外国語の選択に、中国語を採る大学生が増えていると云う。やはり時勢の流である。

ともあれメキシコシティの五日間、街の中では耳にはいるのはスペイン語ばかり、そのおかげでラテンアメリカのクリスマスホリデーの雰囲気“からだ中”で満喫することが出来た。帰りの飛行機は休暇を楽しんだ家族連れのアメリカ人などで満席であった。やがてロサンジェルス空港に着いてターミナルビルに入ったとたん、英語のアナウンスが耳いっぱいにとびこんできた。その時ふと自分の国に帰って来たんだといった不思議な安堵感が湧いた。家内も同じ気持ちだったという。

その後、同じような経験をしたことがある。旧文部省の海外派遣研究費でヨ

ヨーロッパ及びアメリカの大学研究施設を訪ねたときのことである。オランダ、スイス、イタリアの大学、研究所を訪ねた後、ナポリからのフライトでボストン空港に降り立ったときのことである。周囲で聞こえる声が皆英語であることに、何かホッとしたものを感じた。丁度、ハロウィンの時季で、街の大通りにはジャンボカボチャがならべてあったりして、子供達のはしゃいだ声も心地よく聞こえた。それから約一ヶ月の間、アメリカ国内の幾つかの大学や研究所を訪ね、何人かの初対面の教授に会うための長距離日程が控えているのに、ヨーロッパにいた時のように緊張した気持ちには少しもならない。オランダ語、フランス語やイタリア語圏を通過して英語圏に入ると、肌に感ずるものが違うのである。英語を上手く話せるかどうかには関係なく、二年ほど英語(米語)圏に住んでいる間に、身振りに伴って英語の持つ語感が耳に馴染んでいた所為なのであろう。

数十年前になるが、私の友人でイギリスでの学会の帰路、ヨーロッパの国を二～三ヶ国立ち寄って来たのがいた。彼はスウェーデン、フランス等の国々で言葉と通貨に悩まされたが、英語とボディーランゲージで食事だけは一食も欠かさなかったと、妙な事で自慢していたのを覚えている。何事に付けグローバル化が進み、何処にでも日本人の姿を見かける今と違い、当時のヨーロッパ一人旅は気疲れも多かったと思われるが、食事に拘るところは食道楽の彼らしい。

以前、フランス領コルシカ島で開かれた神経発生学の国際ワークショップに出席したときのことである。割り当てられた宿は、コテージ風の趣があり、紺碧の地中海を見下ろすようにして建つ一軒家であった。学術の会議でこんな素敵な景色が楽しめるとは思ってもしなかったが、1日目の夜、ベッドに入って枕が私には低すぎることに気がついた。予備が無いかと部屋を探したが見あたらない。夜も更けていたのでその晩は我慢することにした。翌朝、でっぴりと太って人の良さそうな宿の主人に枕をもう一つ欲しいと頼んだが、フランス語一点張りの彼には一向に通じない。諦めかけようとした時、ウィ、ウィと云って頷いてくれたのでホッとした。

その日の会議も終わり、近所の村でドイツ人の友人達と食事を済ませてホテルに帰ったのは、夜も可成り更けていた。今日は枕を高くして眠れるぞと思い部屋に戻ってみると、頼んでおいた枕が来ていない。その代わり畳んだ毛布が置いてあった。まさか予備の枕がないとは思えない。やはりボディーランゲージを交えても英語の **pillow** では通じていなかったのである。毛布でも役に立たないこともないので、それ以上頼むことは止めることにした。しかし、親切に取り計らってくれたことには違いないので、翌朝、顔を会わせたときにメルシ

ーと礼を言ったら、にっこりと笑顔が返ってきた。

帰国後、思い出して調べたところ、フランス語で枕は *oreiller*、毛布は *couverture* とあった。もし、毛布をもう一枚欲しくてブランケット [*blanket*] と頼んだら、翌朝、私のテーブルの上には、フランス料理の“子牛肉のホワイトソース煮(*blanquette*)”の一皿が、出されたかもしれないのである!? 数日前の新聞のグルメ欄に、或る航空会社の客室乗務員の話がでていた。職業柄、海外の言葉や習慣には慣れているはずの彼女らでも、言葉の壁は意外に高いらしく、パリーでレストランに一人行くには勇気が要するという。その点、ビストロと呼ばれる店の中には、ボディーランゲージを交えて通じ合える気楽な店があると云った紹介記事であった。日本人から見たパリーという街の、食の情景がよく出ているように思えた。

英語にはフランス語等から大量に語彙が取り込まれていると云うが、ヨーロッパを一人旅すると、私の貧弱な外国語の知識の中には存在しない固有名詞に悩まされることが多い。レストランに入ってきてメニューを渡されると、頭の中の格闘が始まるのである。フランス語やイタリア語でびっしりと書かれた文字の中で、分かるのを探しそれらを繋ぎ合わせて料理をイメージする。ここではボディーランゲージも至難の業である。しかし、それもツアー等のグループ旅行には無いある種のスリルであり、後々、記憶に残るものは、身振り手振りの結果通じ合えた場面が多い。旅の楽しみはそんな所にもある。

日本人は、人と話しをする時に、相手の目を見ながら身振り手振りを交えて対応することが不得手な人種である。金田一春彦に依れば、日本人は相手の心を敏感に察知し会話する等気遣いの民族だという。そのため、大袈裟に表現する身振り手振りを使わなくなっただけらしい。しかし、むしろ直情的な欧米人から見ると、何時もスマイル顔で、何を考えているのか分からないともいわれる。その上、イエスとノーの使い方が紛らわしいので、相手は余計に混乱してしまう。観光であれビジネスであれ、毎年、大勢の日本人が海外に出かけるようになり、又、我が国にも仕事や観光に多くの国から人がやって来る。彼らとの接点はグローバル化が進めば進むほどに多くなるはずである。意志の疎通は益々重要になってくる。そんな世の中の情勢を見ていると、日本人が表情豊かにボディーランゲージを身につけるのも、そんなに遠くないのかもしれない。

(平成十五年五月)

(名古屋大学名誉教授)